

## ⑤ 地図の広場をつくる

生駒台小学校に着任した日、校内を一周しました。創立当時、校区内の多くの人たちの持ち寄りで植えられたという木々の中に4棟の校舎と体育館が並んでいました。昭和40年から建設されてきたこれらの校舎は順次大改修の時期を迎え、本館と南館は前年に改修され快適な環境になっていました。そして、この年（昭和63年）には体育館を取り壊して、もっと大きなものに建て替え、平成元年度には新しいプールを建設、浄化槽が新設されました。また、平成2年度には北館の、平成3年度には新館の大改修が行われました。

さて、私の校内一周です。本館の屋上からは642メートルの生駒山が見えました。本館は2階建てでしたが学校自体が高台にあるため南から東、そして西側に広がる住宅地が見渡せました。春の穏やかな日差しの中で、この場所は3年生の社会科学習のすばらしい教室になるような気がしました。ここに生駒市内の地図を描いたらどうだろう、奈良県の地図も描いたらどうだろう。「こっちの方向に市役所があるのか」「近鉄生駒駅はこっち」そんな学習が展開できるのではないかなと思いました。1坪十万円という住宅地の真ん中にある学校です。この校舎の屋上だけでもすごい財産なんだ、これを生かして使えればと思いました。

そのころ、生駒市では特色ある学校づくりが提起され、申請によって一定の予算が認められることになっていました。そして、屋上を学習の広場にしたいという思いが認められ、予算が交付されました。

しかし、東西に長い屋上には南北に長い生駒市や奈良県は描きにくいのです。そんなとき、

「ここに大きな地図記号を描いたらどうですか。市役所の記号は市役

所の方向に、駅の記号は駅の方向に描いたらどうでしょう。学習や遊びに生かせるのではないですか」

というプランを出してくれたのがS先生でした。図工専科の彼は設計図を描いてくれました。それは地図記号に親しみ、ゲームもできる地図の広場で、中央には生駒市の形が表示され、8つの方位に置いた色々な図形は、赤・黄・青の3原色やそれらの中間色であるだいたい色・緑色・紫色に塗り分けられていました。

早速、実施に移され、職員作業が続き、ペンキの空き缶がどんどん増えていきました。夏の屋上は照り返しが強く、日焼け止めクリームを塗ってがんばってくれた先生もいました。

こうして生駒台小学校に新しい学習空間が誕生しました。この空間は、子どもたちの遊び場にもなりました。「こんな楽しい学習空間が生まれた」というニュースが、平成元年11月6日の読売新聞、11月7日の奈良新聞などで報道され、私たちを驚かせました。数日後には「朝の番組で放映したいと思います」という電話があり、11月28日には読売テレビの中継車が学校にやって来ました。まだ暗いうちでした。地図の広場で遊ぶ子どもの姿が「ズームイン朝」で生中継され、生駒台小学校の名物になりました。そして、

「読売新聞で見ましたよ。おめでとうございます」

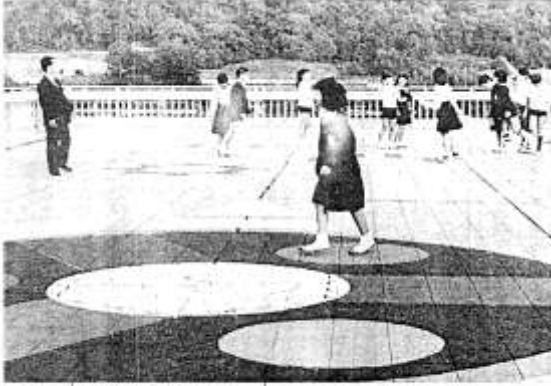
「奈良新聞に出ていましたね」

「テレビで見ましたが、屋上の地図広場、楽しそうですね」

「創造的教育、素晴らしいじゃないですか」

といった声を聞くことになりました。

この広場は、社会の地理的分野の学習に活用をと考えていましたが、みんなで取り組んだ作業の合間に、「正方形のブロックの上にかいた市役所のマークは円の面積の勉強に使えるぞ」「発電所の記号は8方



子供たちの人気を集める「地図記号の広場」

### 生駒台小学校

「地図記号の広場」は、本校の児童が、先生と協力して描いた。児童は、地図記号の広場を、地図記号の広場として活用している。児童は、地図記号の広場を、地図記号の広場として活用している。児童は、地図記号の広場を、地図記号の広場として活用している。

「地図記号の広場」は、本校の児童が、先生と協力して描いた。児童は、地図記号の広場を、地図記号の広場として活用している。児童は、地図記号の広場を、地図記号の広場として活用している。児童は、地図記号の広場を、地図記号の広場として活用している。

「地図記号の広場」は、本校の児童が、先生と協力して描いた。児童は、地図記号の広場を、地図記号の広場として活用している。児童は、地図記号の広場を、地図記号の広場として活用している。児童は、地図記号の広場を、地図記号の広場として活用している。

「地図記号の広場」は、本校の児童が、先生と協力して描いた。児童は、地図記号の広場を、地図記号の広場として活用している。児童は、地図記号の広場を、地図記号の広場として活用している。児童は、地図記号の広場を、地図記号の広場として活用している。

# 屋上は楽しい勉強の広場

## 地図記号、図形いっぱい

### 先生、生徒がヘンキで描く

位の勉強に使いそうだ」といった発想も出てきました。設計者のS先生は、縦横に引かれた直線を遠近法に生かして絵を描く指導に使いました。それは、地図記号の描かれた屋上を近景に、そして遠景に生駒山をおいた景色を、線遠近法（透視図法）を使って表現しようという試みでした。

S先生の報告によると、  
「屋上は、小さなブロックの集まりでできていますから、こうした図法の応用には適切です。消失点を定め、床のます目を描き、地図記号を描かせました。地図記号そのものは知っている6年生ですから、この仕事には作図も取り入れました。彩色の前には、油性ペンで描線を

なぞらせてみました。こうすることによって、彩色によって線が消えることが防げましたし、フリーハンドでなぞった線は描画らしい柔らかな雰囲気を生み出してくれました。また、彩色では、全面を淡い黄色か青色で地ぬりし、薄っぺらな作品にならないようにするとともに、遠景と近景の彩色には空気遠近法の学習を思い出させるようにしました」

ということでした。

こうしてできた作品は、技術偏重の指導にありがちな萎縮したものではなく、また、大人の絵の小型といったものではありません。一生懸命に取り組む中から生まれた清純で澄明な雰囲気がただよい、子どもらしい詩情がかもし出されていて心を打たれるものでした。

こんなことがあって、屋上は楽しく学び、楽しく遊ぶ広場になりました。